

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。夏期講習が終わりましたね。「夏期の目標は達成できたでしょうか？」と問いかけて「はい、完璧です！」と気持ちよく返事のできる受験生はなかなかいないと思います。寧ろ、夏が終わってしまった焦りや不安の方が今は大きいのではないのでしょうか。けれど、ここで立ち止まっている訳にはいきません。この夏、成長した部分、積み残した部分をしっかりと精査して、受験当日まで実力を伸ばせるよう努力を続けて欲しいと思います。

さて、みなさん、1週間ほど時間がありました、どのような解答が仕上がったでしょうか？今回取り上げた東大日本史の第2問は中世からの出題で「室町時代の文化の地方伝播における武士の役割」を考えさせる問題でした。“公家文化と武家文化の融合”や“中央文化と地方文化の融合”は室町文化の特徴として説明されますが、それを具体的に考えさせてくれるのが今回の問題でしたね。それでは早速解説を始めていきましょう。

<文化の地方伝播における武士の役割>

設問

応仁の乱は、中央の文化が地方に伝播する契機になったが、そのなかで武士の果たした役割はどのようなものであったか。乱の前後における武士と都市との関わりの変化に留意しながら、5行以内で述べなさい。

設問のテーマは「応仁の乱前後における、中央の文化が地方に伝播するなかでの武士の果たした役割」。条件として「武士と都市との関わりの変化に留意しながら」とあります。テーマを考える前に、まず条件の部分の固めていきましょう。特に「武士と都市の関わり」が「応仁の乱前後」に「変化した」ことは前提の条件となっていますので、その部分は明確にしておきたいですね。それでは資料文(1)から確認していきます。

(1) 応仁の乱以前、遠国を除き、守護は原則として在京し、複数国の守護を兼ねる家では、守護代も在京することが多かった。乱後には、ほぼ恒常的に在京した守護は細川氏だけであった。

資料文(1)からは守護(=武士)と京都(=都市)の関わりを読み取ることができます。

・ 応仁の乱以前・・・遠国を除き、守護は原則として在京(守護代も在京する場合もあり)

・ 応仁の乱以後・・・恒常的に在京した守護は細川氏のみ

応仁の乱以前に東国・九州を除く守護が在京し、幕府政治に参画していた事情については2011年度の第2問でも扱われていた内容でしたね。

(<http://tsuwamono.kenshinkan.net/way/pdf/11hi>)

強者の戦略

[storyJ_04.pdf](#)

一方、応仁の乱後に恒常的に在京したのは幕政に強い影響力を持った細川氏のみで、その他多くの守護は在京しなかったとあります。それでは多くの守護はどこに所在したのでしょうか。ここで資料文(4)を確認してみましょう。

(4) 応仁の乱以後、宗祇は、朝倉氏の越前一乗谷、上杉氏の越後府中、大内氏の周防山口などを訪れ、連歌の指導や古典の講義を行った。

ここでは越前一乗谷、越後府中、周防山口といった城下町(=都市)が並び、応仁の乱以後には、多くの守護が城下町を中心とした自らの任国に所在していたことを読み取ることができます。

つまり、**応仁の乱以前には、守護は守護代などと在京し幕政に参画していたが、応仁の乱以後には任国に在国することが恒常化していた**、とまとめることができます。

つぎにテーマである、「応仁の乱前後における、中央の文化が地方に伝播するなかでの武士の果たした役割」を考えていきましょう。

(2) 1463年に没したある武士は、京都に在住し、五山の禅僧や中下級の公家と日常的に交流するとともに、立花の名手池坊専慶に庇護を加えていた。

(3) 応仁の乱以前に京都で活躍し、七賢と称された連歌の名手には、山名氏の家臣など3人の武士が含まれていた。

資料文(2)からは、「1463年に没したある武士」、つまり応仁の乱以前に在京した武士が「五山の禅僧や中下級の公家と日常的に交流」したこと、「立花の名手池坊専慶に庇護を加えていた」が書かれていま

す。ちなみに武士が「五山の禅僧や中下級の公家と日常的に交流」するなかでは、**連歌などの身分を超えた“寄合の文化(座の文化)”といわれるものが享受されていた**と推測することができます。そして、資料文(3)では応仁の乱以前に京都で活躍した連歌の名手には山名氏の家臣など3人の武士が含まれていたことが明示され、**応仁の乱以前において在京する武士は文化(=中央の文化)の担い手であった**ということを確認することができます。また、「五山の禅僧」、「立花」という表現からは、**当時の中央の文化が公家文化のみならず禅宗文化の影響を強く受けている**ということも読み取ることができます。

では、応仁の乱後にはどのような変化があったのでしょうか。先にみたように、応仁の乱後には多くの守護が任国に所在するようになります。そのなかで、**守護をはじめとした武士たちは在京していた頃に享受していた中央の文化を地方へと広めていくこととなります**。そして、連歌などが各地で行われるなか、資料文(4)にみられるように、宗祇などの文化人が各地の城下町(=都市)を訪れ、中央の文化の地方への伝播をさらに促していったのです。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

【解答例】

応仁の乱以前には、守護をはじめとする武士は在京し幕政に参画する一方で、連歌などの身分を超えた寄合の文化や、公家文化や禅宗文化を享受する中央の文化の担い手であった。応仁の乱以後には、守護は任国に所在し、城下町に中央の文化を移植し、文化人を招くなどして中央の文化を積極的に地方に伝播させる役割を果たした。(150字)

強者の戦略

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。

この『強者の戦略WEBサイト』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！